東洋史研究
第七十九巻　第三號　令和二年十二月發行

「前四史」夷狄列傳に見える四夷觀念の展開

三津間　弘彦

はじめに
一　『史記』の夷狄列傳
二　『漢書』の夷狄列傳
三　『三國志』の夷狄列傳
四　『後漢書』の夷狄列傳
まとめ

はじめに

前漢武帝期に開始された對匈奴戰爭は、夷狄を排除する攘夷論と、九世の復讐を是認する『春秋公羊傳』によって正當化された。これを事實上の出發點として、漢代以降、國家を正統化する要素としての華夷觀は、『穀梁傳』・『左傳』を含

めた春秋三傳を根據としながら構築されていくこととなった。

ここから中國王朝の對外政策を規定していく華夷思想は、その正統性を擔保する思想的營爲として注目され、これまでその形成過程、そしてその理論の根據となる春秋三傳を中心とする經書との關わりの中で論じられることが多かった。[1] さらに近年では、その實際の統治への反映についての檢討も進んでいる。[2] 一方で、王朝の正統性を擔保するという華夷思想の役割に注目するならば、同樣の役割を擔う史書の編纂との相互の關わりを無視することはできないはずであるが、この問題について顧みられることはほとんどなかった。[3]

そうした中で近年、後漢儒教國家論を掲げる渡邉義浩は、『三國志』東夷傳を論じる過程で紀傳體の先驅とも言える「前四史」の夷狄列傳を概括している。氏の概括についていまいちど整理しておきたい。

①『史記』には、經書の「四夷」という概念のもとに一箇所にまとめて整理するという思想がない、いまだ儒教が國教化されていなかったからである。

②『漢書』は夷狄の列傳を一箇所にまとめるものの、匈奴・西域の分量が他の夷狄の列傳に比して大きく全體のバランスに缺ける。それは前漢以來漢にとって、匈奴の脅威とそれにともなう西方での戰いの政治的影響があまりに大きいためである。

③『三國志』には、魏から西晉にかけての國內外の情勢により、南蠻・西戎の列傳が存在しない。

④儒教の中華思想を表現するために正史は四夷傳を備えたが、四夷の全てにつき立傳し、一箇所にまとめたのは『後漢書』からである。[4]

まず『史記』とそれ以降の間に儒教國教化の問題があることを指摘したことは、一つの前進であろう。だが、『史記』の夷狄列傳が後の正史のように一箇所にまとめられない理由を、儒教國教化以前に成立したことに求める點は、撰者である司馬遷自身が董仲舒に學び、『春秋』をはじめとする經書を遵奉し（『史記』太史公自序）、儒教の徒とも言える人物であ

ることからも、より愼重な檢討の必要性があるだろう。また、儒敎が國敎化されたとする後漢時代に完成された『漢書』において、儒敎に基づく整然とした四夷傳の整理が行われること無く、編纂當時の國際情勢を優先したバランスに缺ける編纂が爲された點も說明されねばなるまい。それは、『三國志』でも同樣の問題點となろう。そして、なぜ『後漢書』に至って四夷傳が整備されたのかという點も究明されねばなるまい。

そこで注目すべきは、華夷觀と言うよりもむしろ夷狄を四方向に分類する四夷觀念であろう。そもそも四夷とは、『禮記』曲禮下に見える「東夷・北狄・西戎・南蠻」を指すが、歷史上この四つの方位の夷狄が、中國にとって同時に均等な勢力であったことはない。當然ながら各時代における四夷の比重の差異は史書に如實に反映され、四夷の傳が整備された『後漢書』でさえ、東夷傳と西羌傳とでは大きく文字數が異なる。それは列傳全體の文字數もさることながら、撰者の論の文字數の差異に大きく表れている。その點を考慮すれば、『漢書』が匈奴・西域に比重を置き、他の夷狄の列傳を壓縮することはむしろ當然であろう。にも關わらず、後の『後漢書』は、撰者が西羌や南匈奴の論に多くの文章の量を割くと同時に東夷と南蠻それぞれに傳を立てているのである。この兩者の差異の根底には、表層的な華夷觀の違いというよりも、情勢の變化に應じて東西南北の夷狄をそれぞれどのように歷史に位置づけるか、という四夷觀念の時代的變化があるのではないか。すなわち、中國が外國勢力を夷狄として歷史的に位置づけていくうえで、四夷に分類する觀念がどのような役割を果たしたのかという點を理解することが、正史に見える夷狄列傳と華夷思想との關わりの理解に繫がるのではないだろうか。

そこで本稿は、「前四史」とも總稱され、初期の紀傳體史書を代表する『史記』・『漢書』・『三國志』・『後漢書』の夷狄列傳の比較を通じて、その立傳のありかたを規定した四夷觀念を、とくに撰者の主觀が反映しやすい列傳ごとの史論部分から讀み解き、それぞれの時代的背景との關係を檢討することとしたい。

なお、正史に見える夷狄の列傳は、四夷傳と稱するのが通例である。だが、後述するように『史記』の列傳は、夷狄を

そもそも四夷觀念のもとに整理しておらず、それを四夷傳と呼ぶことには躊躇せざるを得ない。とはいえ、『史記』を含めた夷狄の列傳を比較檢討していくうえでは、『史記』とそれ以降とで呼稱を分けることも混亂を招きかねない。そこで本稿では「前四史」を通じた夷狄の列傳の汎稱として夷狄列傳と稱することをあらかじめ提示しておきたい。

一　『史記』の夷狄列傳

司馬談から司馬遷を經て武帝期征和二（前九一）年に成立した『史記』には、匈奴列傳・南越列傳・東越列傳・朝鮮列傳・西南夷列傳・大宛列傳の六つの夷狄の列傳がある。その夷狄列傳が特異なのは、『漢書』のように一箇所にまとめられず、匈奴列傳・南越～西南夷列傳・大宛列傳が三箇所に分散している點である（→表『史記』）。この配列について、清の趙翼は、以下のように批判を展開する。『廿二史箚記』卷一　史記編次に、

史記の列傳の次序、蓋し一篇を成すに、卽ち一篇を編入し、ⅰ撰して全書を成せし後を待ちて、重ねて排比を爲さず。故に李廣傳の後、忽ち匈奴傳を列し、下は又衞青・霍去病傳を列す。ⅱ朝臣外夷に相ひ次ぐこと、已に不倫に屬す。然るに此れ猶ほ諸臣の事皆匈奴と相ひ涉ると曰ふ。公孫弘傳の後、忽ち南越・東越・朝鮮・西南夷等の傳を列し、下は又司馬相如傳を列し、相如の下、又淮南・衡山王傳を列す。循吏の後、忽ち汲黯・鄭當時の傳を列す。儒林酷吏の後、又忽ち大宛傳を入る。ⅲ其の次第皆意義無く、其の得るに隨ひ編に隨ふを知る可きなり。(5)

とある。ⅰ『史記』は、全卷を完成した後に然るべき基準による各卷の配列が行われていない。ⅱ朝臣と夷狄という異なる種類の列傳が交錯して續いている。ⅲその順序に意味は無く、出來上がるたびに組み込んでいったものであると指摘している。

だが、佐藤武敏も指摘するように、匈奴列傳と懸隔して配列される四つの夷狄列傳の間には、目的の相違を見出すべきであり、けっして全體が無秩序であるとは言えない。(6) そもそも、『史記』の配列を無意味と斷じる趙翼の「次第」とは、

あくまで清代までに確立された正史の書法からの見方に過ぎず、こうした『史記』そのものの成り立ちを無視した議論は、拙速であろう。では、なぜ『史記』は夷狄列傳をこのように配列したのであろうか。『史記』巻百三十　太史公自序には、夷狄列傳立傳の理由が以下のように記されている。

①三代自り以來、匈奴常に中國の患害と爲る。彊弱の時を知り、備へを設け征討せんと欲す。匈奴列傳第五十を作る。[7]

……

②漢既に中國を平げ、而して佗能く楊越を集めて以て南藩を保ち、貢職を納む。南越列傳第五十三を作る。[8]

③吳の叛逆するや、甌人濞を斬り、封禺を葆守して臣と爲る。東越列傳第五十四を作る。[9]

④燕の丹遼の間に散り亂るるや、滿其の亡民を收め、厥れ海東に聚め、以て眞藩を集め、塞を葆ちて外臣と爲る。朝鮮列傳第五十五を作る。[10]

⑤唐蒙使して夜郎に略通し、而して邛笮の君請ひて內臣と爲り吏を受く。西南夷列傳第五十六を作る。[11]

……

⑥漢既に使を大夏に通じ、而して西極の遠蠻、領を引きて內に鄉かひ、中國を觀んと欲す。大宛列傳第六十三を作る。[12]

①匈奴は「常に中國の患害」であるから。②南越・③東越・④朝鮮・⑤西南夷は、「貢職を納」め、「臣」・「外臣」もしくは「內臣」として間接直接を問わず漢の「臣」となったから。[13] そして⑥大宛は、「西極の遠蠻」が「中國」を見たいと望んだからという理由が掲げられている。

ここから①匈奴と②南越から⑤西南夷、そして⑥大宛との間でそれぞれ立傳の理由が異なることが見て取れる。なるほど②から⑤は夷狄の諸臣國の列傳（以下、諸臣國列傳と略す）としてまとめられるとしても、ではなぜ①匈奴と⑥大宛は諸臣國列傳と懸隔して置かれたのであろうか。まずは匈奴列傳から檢討を加えていきたい。

『史記』の匈奴列傳の周邊の列傳を見ると（→表『史記』）、韓長孺列傳は、匈奴に對する和親策を掲げながらも馬邑の役

後の對匈奴戰爭の方針が轉換していく中で失意の內に歿した韓安國の列傳。李將軍列傳は、前漢の對匈奴戰爭で活躍しながらも最終的に作戰に遲參して自刎した李廣の列傳。匈奴列傳は、匈奴そのものの列傳。衞將軍驃騎列傳は、對匈奴戰爭を前漢優位に導いた衞靑と霍去病の列傳である。先に見たように趙翼は、この配列を無秩序と批判しながらも「然るに此れ猶ほ諸臣の事皆匈奴と相ひ涉ると曰ふ」としてこれらが匈奴に關わる列傳であることは認めている。それに加えて、佐藤が指摘するように平津侯主父列傳は、對匈奴戰爭に批判的な諸論者の列傳と言える。[14] この一聯の列傳が、對匈奴戰爭という共通項による枠組みであることは明らかであろう。では、『史記』はその中で匈奴列傳をどのように位置づけるのであろうか。①『史記』卷一百十　匈奴列傳に、

太史公曰く、ⅰ孔氏春秋を著し、隱桓の閒は則ち章かなれども、定哀の際に至れば則ち微たり。其の當世に切なるの文なるが爲にして褒罔（な）し、忌諱の辭なり。世俗の匈奴を言ふ者は、其の一時の權を徼（もと）め、而して調（つら）ひて其の說を納むるに務め、以て偏指を便とし、彼己を參せざるをるを患ふ。將率中國の廣大なるに席（よ）りて、氣奮ひ、人主因りて以て策を決す。是を以て功を建つること深からず。ⅱ堯賢なりと雖も、事業を興すも成らず、禹を得て九州寧んず。且つ聖統を興さんと欲せば、唯だ將相を擇任するに在るのみ哉。[15]

とある。ⅰ『春秋』の微言大義が隱・桓の時代を明確に記述するにも關わらず定・哀では不明瞭な記述となっているのは、同時代に密着した文章で褒めようがなかったため、遠慮したものであることを指摘する。そして、ⅱ「聖統」を興隆させる手段は、將軍宰相に然るべき人物を選ぶのみであると結論づける。このように、司馬遷の評價の方向性は中國側に向けられ、夷狄としてどのように匈奴を捉えていたのかは論じられない。この匈奴列傳の太史公曰を見る限り、匈奴そのものへの關心は見出せず、對匈奴戰爭という事業とそれに對する漢への評價に重きが置かれているようである。

では次に、諸臣國列傳はどのように位置づけられているのか。同樣に太史公曰を檢討したい。

②『史記』卷一百十三　南越列傳

太史公曰く、ⅰ尉佗の王、本は任囂に由る。漢の初めて定むるに遭ひ、列せられて諸侯と爲る。隆慮溼疫に離り、佗以て益々驕るを得たり。甌駱相ひ攻め、南越動搖す。漢兵境に臨み、嬰齊入朝す。其の後國を亡ぼすは、徵は樛女に自る。呂嘉小忠にして、佗をして後無からしむ。ⅱ樓船欲を從にし、怠り傲りて失惑す。伏波困窮せしも、智慮愈々殖え、禍に因りて福を爲す。成敗の轉、譬ふるに糾墨の若し。(16)

③『史記』卷一百十四　東越列傳

太史公曰く、ⅰ越蠻夷なりと雖も、其の先豈に嘗て民に大いなる功德有る哉。何ぞ其の久しきや。數代を歷て常に君王と爲り、句踐一たび伯を稱す。然るに餘善大逆するに至り、國を滅ぼし衆を遷さるるも、其の先の苗裔の繇王の居股等猶ほ尙ほ封ぜられて萬戶侯と爲る。此れに由りて越の世世公侯爲るは、ⅱ蓋し禹の餘烈なることを知る。(17)

④『史記』卷一百十五　朝鮮列傳

太史公曰く、ⅰ右渠固を負み、國以て祀を絕つ。ⅱ涉何功を誣き、兵の發首と爲る。ⅲ樓船狹を將ゐしも、難に及びて咎に離る。番禺に失するを悔ひ、乃ち反って疑はる。荀彘は勞を爭ひ、遂と與に皆誅さる。兩軍俱に辱しめられ、將率侯莫し。(18)

⑤『史記』卷一百十六　西南夷列傳、

太史公曰く、ⅰ楚の先豈に天祿有らんか。周に在りては文王の師と爲り、楚に封ぜらる。周の衰ふるに及び、地は五千里を稱す。ⅱ秦諸侯を滅ぼし、唯だ楚の苗裔のみ尙ほ滇王有り。ⅲ漢西南夷を誅し、國多く滅びしも、唯だ滇のみ復た寵王と爲る。然るに南夷の端、枸醬を番禺に見、大夏邛竹を杖とするにあり。ⅳ西夷後に揃ひ、二方に剽分し、卒に七郡と爲す。(19)

まず②南越列傳では、ⅰ南越王國の略歷が述べられ、趙佗の曾孫である嬰齊の后である樛女によって王國が動搖し、呂嘉の反亂によって南越が滅亡したことを指摘し、ⅱ南越討伐に關わった樓船將軍の楊僕や伏波將軍路博德への評價が論じら

れている。③東越列傳では、ⅰ越の祖先の功績を稱え、東越王の餘善の顚末と、その餘善を殺害して漢に封ぜられた居股が萬戸侯となったことを論じ、ⅱそれが禹の遺德によるものであると結論づけている。④朝鮮列傳では、ⅰ衞氏朝鮮の右渠が漢に滅ぼされ、ⅱ涉何が朝鮮側の見送りの使者を殺害したことが兵亂の發端となり、ⅲ樓船將軍楊僕や荀彘が軍功を爭って結果的に庶民に落とされ、あるいは誅殺されたことが論じられる。そして、⑤西南夷列傳では、ⅰ楚の先祖が周によって楚に封ぜられ、ⅱ秦が諸侯を滅ぼす中で楚の苗裔（滇を建國した莊蹻）のみが滇王として存續し、ⅲ漢が西南夷諸國を滅ぼしていく中で滇のみが王として待遇を受けたことが指摘され、ⅳ西南夷の地域に郡縣が置かれたことが述べられる。

この①匈奴列傳と②～⑤の諸臣國列傳を比較して氣になるのが、②「樓船」・「伏波」、④「涉何」・「樓船」・「荀彘」といった、諸臣國と關わった漢側の人物たちがそれぞの夷狄列傳の中で評價の對象とされている點である。彼らは、基本的には『史記』に立傳されず、②と④に登場する樓船將軍の楊僕の傳がわずかに王溫舒傳（酷吏傳）に附隨して見えるのみである。つまり諸臣國列傳は、それぞれの夷狄が、それに關わる事業、人物を含めて一つの列傳に壓縮されているのである。すると逆に①匈奴列傳は、匈奴に關わる人物の列傳に圍まれることで、匈奴に關わる列傳群という、諸臣國列傳一つ一つに比して、より大きな枠組みの中に位置づけられていることが浮き彫りとなるであろう。

先に匈奴列傳では匈奴そのものに關心を見せず、對匈奴戰爭という事業と漢の對應への評價に重點が置かれていたことを確認した。だが、②～⑤は、その共通點として、漢側の人物たちと同樣に、夷狄そのものもまた太史公の評價の對象となっていることは注意を要する。①匈奴列傳の太史公曰において匈奴そのものへの關心が見受けられなかったことは、むしろ匈奴を評價の對象とすることができなかったことを示しているのではないだろうか。『史記』は、匈奴と諸臣國とを同列に位置づけていないのである。

こうした匈奴と諸臣國とを區分して位置づける『史記』の夷狄列傳のあり方は、編纂時の情勢に關わる。『漢書』卷七十八　蕭望之傳に、

初め、ⅰ匈奴の呼韓邪單于來朝するに、公卿に詔して其の儀を議せしむ。丞相の霸、御史大夫の定國議して曰く、聖王の制、德を施し禮を行ふこと、京師を先にして諸夏を後にし、諸夏を先にして夷狄を後とす。ⅱ詩に云ふ、禮に率ひて越えず、遂に視て既く發なふ。相土烈烈として、海外截たること有りと。陛下の聖德は天地に充塞し、四表を光被し、匈奴の單于風に鄉ひて化を慕ひ、珍を奉じて朝賀し、古自り未だ之有らざるなり。其れ禮儀として宜しく諸侯王の如くし、位次は下に在らしむべしと。ⅲ望之以爲へらく、單于は正朔の加ふる所に非ず、故に敵國と稱す。宜しく待するに不臣の禮を以てし、位は諸侯王の上に在らしむべし。……。[20]

とある。ⅰ武帝期から宣帝期にかけて、漢と匈奴の形勢が逆轉し、匈奴の呼韓邪單于の來朝が取り沙汰される中、ⅱ『詩經』商頌　長發を根據とした夷狄觀によって、匈奴の單于を諸侯王より格下とする方針も提示されるが、ⅲ蕭望之は、匈奴が「敵國」であるとして、來朝した呼韓邪單于を諸侯王より上の待遇とすべきと反論している。結局、蕭望之の反論が採用され、甘露三（前五一）年、宣帝は「客臣」・「不臣の禮」によって匈奴を遇する（『漢書』卷八　宣帝紀）。漢の優勢が明確となるこの時期においてもなお、匈奴は漢の「敵國」として位置づけざるを得ない脅威と見なされていたのである。[21] まして、『史記』が編纂された武帝期は、匈奴への反擊が開始されて間もない時期であり、漢にとってより大きな脅威であったことは言を俟たない。

『史記』は儒教的素養をもつ司馬遷によって撰されたにも關わらず、その夷狄列傳が一箇所にまとめられることはなかった。すくなくとも匈奴と諸臣國列傳の懸隔の背景として、當時「敵國」であった匈奴に對し、四夷を同列視する後世の夷狄列傳のような枠組みで整理を行い得なかったことは揭げられよう。『史記』は、對匈奴戰爭という事業の枠組みに匈奴列傳を包含し、諸臣國列傳と區分したのである。

ではさらに匈奴列傳、そして諸臣國列傳とも懸隔する⑥大宛列傳は、どのように位置づけられているのであろうか。先述したように太史公自序は、「西極の遠蠻」が「中國」を見ようとしたことに大宛列傳の立傳理由を求めている。次に、

大宛列傳を取り巻く周圍の列傳を確認したい。

諸臣國列傳から大宛列傳までの配列を見ると（↓表『史記』）、②～⑤の諸臣國列傳と酷吏列傳との間には司馬相如列傳から儒林列傳まで五卷にわたる懸隔があるが、これについて司馬貞『史記索隱』卷二十八　大宛列傳の條に、

　按ずるに此の傳合に西南夷の下に在るべし。宜しく酷吏・游俠の間に在るべからず。今誤りて此に列するなり。[22]

とある。唐代の司馬貞によれば、大宛列傳が酷吏・游俠列傳の間に置かれたことは誤りであり、本來は諸臣國列傳の下に置かれるべきだと言うのである。だがこれは、先述した趙翼の解釋と同じく、後世からの解釋にすぎない。榎一雄も指摘するように、太史公自序が示す從來通りの配列そのままに檢討すべきである。[23]

では、前後して置かれる列傳との關係をどのように見るべきであろうか。佐藤は、諸臣國列傳以降について、(1)個人の列傳である司馬相如列傳・淮南衡山列傳・汲鄭列傳、(2)外國に關する南越列傳・東越列傳・朝鮮列傳・西南夷列傳（ここまで先述した諸臣國列傳）・大宛列傳、(3)才能や職業によりまとめられた循吏列傳・儒林列傳・酷吏列傳・游俠列傳・佞幸列傳・滑稽列傳・日者列傳・龜策列傳・貨殖列傳としている。[24] 大宛列傳について佐藤は、配列にかかわらず外國に關する列傳として分類しているのである。

あらためて大宛列傳の前後の列傳について確認しておくと、前に置かれる酷吏列傳は、嚴格に刑罰を執行した人物の列傳、一方、後方に位置する游俠列傳は、法に從わずに地域で一定の勢力を有した游俠の徒の列傳であり、才能によりまとめられた列傳であることは納得できよう。さらに後方に置かれる佞幸列傳以下についても、それぞれ佐藤の分類は妥當なものと言える。だが、これら(3)才能や職業による列傳に挾まれる位置に大宛列傳がおかれているという配列そのものを問題視しないことには疑問が生じる。その點を踏まえたうえで次に、その太史公曰を見ると、

③『史記』卷一百二十三　大宛列傳に、

　太史公曰く、ⁱ禹本紀に言ふ、河崑崙より出づ。崑崙其の高さは二千五百餘里、日月の相ひ避け隱れ光明を爲す所な

り。其の上に醴泉・瑤池有りと。ⅱ今張騫大夏に使ひせし自りの後、河の源を窮め、惡ぞ本紀の所謂る崑崙なる者を睹んや。ⅲ故に九州山川を言ふは、尚書之に近し。禹本紀・山海經の怪物有る所に至りては、余敢て之を言はざるなり。(25)

とある。ⅰそれまでの定説であったであろう『禹本紀』に見える黄河の水源である崑崙山が日月が出る場所であるという情報について、ⅱ張騫が大夏に到達したことから、『禹本紀』の崑崙の記述に疑問を呈し、ⅲ中國の地理情報については、『尚書』が正確に近いということ、そして『禹本紀』・『山海經』の人知がおよばない傳説には觸れないことが述べられる。

ここで顧みるべきは、諸臣國列傳の太史公曰で、それらはいずれも對象となる夷狄の存亡、そしてそれに關わる人物たちの評價が展開されていたことである。だが、この太史公曰には、夷狄や人物への評價は見られず、張騫が大夏に赴いたこと、そして漢の地理情報が變化したという點が掲げられるにとどまっている。翻ってみるに大宛列傳は、前半で張騫の事績を中心に展開され、張騫亡き後は、ほぼ李廣利の大宛遠征に關わるものが占めている。こうした部分は、後に『漢書』において、張騫李廣利傳として西域傳とは別に立傳されることとなるが、大宛列傳の内容は、こうした個人の事績を軸として記事が展開されているのである。このことから、一見すると外國に關わる列傳に見える大宛列傳は、むしろ佐藤の分類(3)に位置づけるべきではないだろうか。

ここまで『史記』の夷狄列傳を檢討してきた。『史記』の夷狄列傳が趙翼に批判されるような一見、無秩序な配列となった背景には、一つは匈奴が大きな脅威であり、他の夷狄と同列に扱うことが出來なかったこと。そして、二つには、後世においては西戎の列傳として認識される大宛列傳が、『史記』においては、張騫という稀有な才能を有する人物を軸として、地理情報の變化という漢の版圖に關わる特定の分野の記錄として位置づけられた列傳であったことがあげられよう。そこに後世のような四夷觀念のもとに、夷狄を一箇所にまとめるという理念は介在し得なかったのである。

このように『史記』は、後世の正史の書法からは捉えがたい存在であったが、一轉して『漢書』は、經書の四夷の觀念

のもとに外國勢力を整理することとなる。

二　『漢書』の夷狄列傳

『史記』が紀傳體を創出する一方、『漢書』は紀傳體を繼承する形で斷代史を創出した。その列傳は、後漢初の班彪『後傳』を批判繼承する班固によって完成された。[26] この夷狄列傳は、後世の一般的な夷狄列傳のように一括して配列される。そして匈奴・西域はそれぞれ一つの列傳として立てられ、いずれも後世において上下の列傳として再編されるほどの紙幅が割かれた。その一方、東夷・南蠻については西南夷兩粵朝鮮傳として壓縮されており（→表『漢書』）、先述したように、『漢書』の四夷傳は、匈奴・西域が占める比重が大きいのである。

その背景として、『漢書』編纂當時の班固を取り巻く國際情勢がある。前漢宣帝期以降、漢の敵國であった匈奴の勢威は衰え、後漢時代に入ると南北に分裂する。分裂した匈奴は、南匈奴が後漢の藩屏として內地化していく一方、北匈奴は永元三（九一）年に潰走する。[27]『漢書』の夷狄列傳は、漢の「敵國」であった匈奴の凋落を背景として、匈奴を他の四夷と同列の夷狄として總括し得たのである。では、かかる『漢書』の夷狄列傳は、四夷それぞれをどのように位置づけるのであろうか。

『漢書』の夷狄列傳の位置づけを檢討するうえで、列傳の班固贊に注目したい。『漢書』卷九十四　匈奴傳贊に、

> 書「蠻夷夏を猾す」を戒め、詩「戎狄を是れ膺つ」を稱し、春秋「有道守りは四夷に在り」と。久しきかな夷狄の患と爲ること。[28]

とある。ここでは匈奴を論じるうえで、『尙書』舜典・『詩經』魯頌閟宮・『春秋左氏傳』昭公二十三年を根據として夷狄を脅威と捉える四夷觀念が展開される。そして同じく『漢書』卷九十四　匈奴傳贊に、

> i若し乃ち征伐の功は、秦漢の行事、嚴尤之を論じて當たれり。故に先王土を度り、封畿を中立し、九州を分け、五服

を列し、土貢を物(み)、外内を制し、或は刑政を脩め、或は文德を詔するは、遠近の勢異なればなり。ⅱ是を以て春秋は諸夏を内にして夷狄を外にす。夷狄の人貪りて利を好み、被髪左衽にして、人面獸心。其の中國と章服を殊にし、習俗を異にし、飲食同じからず、言語通ぜず、北垂寒露の野に辟居し、草を逐ひて畜に隨ひ、射獵して生を爲し、ⅲ隔つるに山谷を以てし、雍(ふさ)ぐに沙幕を以てするは、天地の外内を絶つ所以なり。(29)

とある。ⅰ嚴尤の論とは、征伐のあるべき姿として、周の宣王が戎狄の侵入を退けたことを中策、前漢武帝の對匈奴戰爭を下策、秦始皇帝の長城建設を無策として、夷狄への「上策」は存在しないというものであるが、この匈奴を攻擊しようとした王莽を諫めた嚴尤の論を妥當とする。そして、ⅱ『公羊傳』成公十五年により、中華と夷狄が普遍的に「内」と「外」に區分され、ⅲそれは文化的な差異にとどまらず、山谷や沙漠によって物理的にも「内」と分斷された「外」であると强調するのである。

また、『漢書』卷九十六　西域傳贊には、

ⅰ淮南・杜欽・揚雄の論、皆以爲へらく此れ天地の區域を界別し、外内を絶つ所以なり。ⅱ書に曰く、西戎卽き序すと。禹の既に就きて之を序するは、上の威服して其の貢物を致すに非ざるなり。(30)

とある。ⅰ閩粵討伐に反對した淮南王安（『漢書』卷六十四　嚴助傳）、西域の罽賓(けいひん)王への返禮に反對した杜欽（『漢書』卷九十六　西域傳上）、そして匈奴の烏珠留單于の入朝を促す揚雄の論（『漢書』卷九十四　匈奴傳下）に含まれる夷狄の隔絶性が踏まえられた上で、中國と夷狄が「天地の區域を界別」していることが强調され、ⅱ西域を『尙書』禹貢の「西戎」として位置づける。ここでは、夷狄が地理的に隔絶された存在であり、「西戎」もまた同樣であることが論じられている。このように、匈奴列傳、西域列傳は經書の夷狄觀にもとづきながら兩者を「外」であり「内」と隔絶した存在として位置づけているのである。

次に、西南夷兩粵朝鮮傳の位置づけを確認したい。『漢書』卷九十五　西南夷兩粵朝鮮傳贊に、

贊に曰く、ⅰ楚・粤の先、歴世土を有つ。周の衰ふるに及び、楚の地方五千里にして、句踐も亦た粤を以て伯たり。秦諸侯を滅ぼし、唯だ楚のみ尚ほ滇王有り。漢西南夷を誅し、獨だ滇のみ復た寵せらる。東粤の國を滅ぼし衆を遷すに及び、繇王の居股等猶ほ萬戸侯と爲る。ⅱ三方の開くこと、皆な好事の臣に自る。故に西南夷は唐蒙・司馬相如に發(おこ)り、兩粤は嚴助・朱買臣に起り、朝鮮は涉何に由る。世の富盛なるに遭ひ、動もすれば能く成功せしも、然るに已(はなは)だ勤めり。ⅲ追觀するに太宗（文帝）尉佗を填撫すること、豈に古の所謂攜(はな)れたるを招くに禮を以てし、遠きを懷くに德を以てする者ならんや。[31]

とある。ⅰ楚・粤が歴代版圖を保ってきたことを述べ、楚の末裔である滇や、東粤の居股がそれぞれ漢に封ぜられたことを論じる。ところが、ⅱ武帝の征服事業を「好事の臣」によるものとし、ⅲ『春秋左氏傳』僖公七年の「攜(はな)れたるを招くに禮を以てし、遠きを懷くるに德を以てす」を根據として、南越王を諸臣國として慰撫した文帝を高く評價している。

ⅰは、先に見た『史記』の諸臣國列傳の史論②～⑤の中から東越・西南夷への評價を拔き出したものである。問題は、ⅱとⅲである。ⅱでは、すなわち武帝の征服事業はあくまで「好事の臣」によるものであり、帝王の事績にふさわしからぬものとして否定している。そして、ⅲにおいて『左傳』を引くことで、文帝の南越への對應を稱揚するのである。つまり、西南夷・兩粤・朝鮮は、「攜(はな)れ、「遠」い存在であり、武帝のような直接支配は否定されるものであった。言わばこの列傳もまた、夷狄を「內」と隔絶した「外」として位置づけているのである。

このように、『史記』において匈奴と諸臣國列傳・大宛列傳に分斷された四夷の列傳は、『漢書』において夷狄列傳として一體的に整理された。そして、それは『公羊傳』や『左傳』などを根據とした儒教的な夷狄觀のもとに、四夷全てを「外」として一元的に把握しようとするものだったのである。

では、儒教的教義に基づきながら夷狄を「外」なる存在として一元的に總括する『漢書』の夷狄列傳は、その後どのように繼承されたのであろうか。次に、後漢末の混亂と三國を經て、西晉に編纂された『三國志』について檢討してい

きたい。

三　『三國志』の夷狄列傳

西晉初期の陳壽により撰された『三國志』は、「魏志」は王沈『魏書』、「吳志」は韋昭『吳書』を基礎とし、「蜀志」は譙周『蜀本紀』・陳壽『益都耆舊傳』によって補完されているが、その夷狄列傳は「魏志」に烏丸鮮卑東夷傳として備えられた（→表『三國志』）。この『三國志』の夷狄列傳は、魏を正統とするため、「魏志」にのみ立てられ、南蠻を扱った列傳は存在しない。[32] また、司馬懿と對立した曹爽の父曹眞の功績である大月氏の魏への朝貢を稱揚することにつながるため、西戎＝西域傳が排除されている。[33] かかる陳壽の編纂のありかたは、後世批判の對象となり、劉宋の裴松之注によって『魏略』西戎傳が大量に引用されることとなった（『魏志』烏丸鮮卑東夷傳裴松之注引『魏略』西戎傳）。

だが、『三國志』は西、南の夷狄の存在そのものを無視したわけではない。『吳志』巻六十　賀全呂周鍾離傳評に、

評に曰く、i山越好みて叛亂を爲し、安んじ難く動じ易し。是を以て孫權外禦に遑（いとま）あらず、魏氏に卑詞す。凡そ此の諸臣、皆克く內難を寧んじ、邦域を綏靜する者なり。呂岱は淸恪にして公に在り、周魴は譎略にして奇多く、ii鍾離牧は長者の規を蹈み、全琮は當世の才有り、時に貴重せらるるも、然るに姦子を檢せざれば、譏を獲名を毀つと云ふ。[34]

とあるように、i山越への對應に孫吳が苦慮したことが論じられ、ii武陵蠻を破った鍾離牧の列傳が立てられている。[35] また、この列傳そのものが山越を打ち破った賀齊を筆頭として構成されているのである。また、『蜀志』巻四十三　黃李呂馬王張傳評には、

評に曰く、黃權は弘雅にして思量あり、李恢は公亮にして志業あり、呂凱節を守りて回（ま）げず、馬忠は擾（な）らして能く毅（か）ち、王平は忠勇にして嚴整、張嶷は識斷にして明果、咸長ずる所を以て、名を顯し迹を發するは、其の時に遇ふなり。[36]

とある。この傳が蜀漢の西南夷統治を司る庲降都督を歴任した人物たちの傳であることは傳の本文より自明のことである。[37]李恢は、諸葛亮の南征の案内役を務め、呂凱は雲南太守として「叛夷」に殺害された。馬忠は、「威恩」を併用し、そのため蠻夷は「畏」れ「愛」した。張嶷の死後、南土の越嶲の民夷はこれを悲しみ、彼の廟を立てた。この列傳が、西南夷と蜀漢との關わりを重視した列傳であることは明らかであろう。

正統ではない『吳志』・『蜀志』には、夷狄列傳が見えないものの、吳の山越・蜀の西南夷をめぐる立傳に見られるように、夷狄（山越・武陵蠻・西南夷）との關わりを重視する列傳は、立てられているのである。

また、魏の正統に大きく關わりながら、政治的事情で『三國志』から傳そのものを排除された西戎についても、完全に無視しているわけではない。『魏志』巻三十　東夷傳序に、

> i書に「東は海に漸（すす）み、西は流沙に被（およ）ぶ」と稱す。其の九服の制、得て言ふ可きなり。然るに荒域の外、譯を重ねて至り、足跡車軌の及ぶ所に非ず、未だ其の國俗殊方を知る者有らざるなり。ii虞自り周に曁（およ）び、西戎に白環の獻有り、東夷に肅愼の貢有り、皆曠世にして至り、其の遐遠なるや此の如し。漢氏の張騫を遣はして西域に使し、河源を窮め、諸國を經歴せしむるに及び、遂に都護を置きて以て之を總領し、然る後に西域の事具さに存し、故に史官詳載を得たり。iii魏興り、西域盡くは至ること能はずと雖も、其の大國の龜茲・于寘・康居・烏孫・疏勒・月氏・鄯善・車師の屬、歳ごとに朝貢を奉ぜざるは無く、略ぼ漢氏の故事の如し。[38]

とある。i『尚書』禹貢の世界觀が展開されるが、ここでは東と西が竝稱され、ii西王母の白環獻上、肅愼の貢獻の故事が掲げられる。[39]そして、iii魏における「龜茲・于寘・康居・烏孫・疏勒・月氏・鄯善・車師」といった西域の大國による朝貢が概括されている。このように、政治的理由によって西戎傳を排除しながらも、東夷傳の序文においては、東夷と西戎を竝列的に論じており、四夷の中の西戎の重要性は認識されているのである。

このように『三國志』は、三國の分裂と西晉の成立事情により南蠻・西戎の列傳を立てることが出來なかった一方で、

四夷の記述の完備の必要性は自覺しており、立傳し得ない南蠻については『蜀志』や『吳志』に組み込む形で採錄したのである。

では、かかる事情を有する『三國志』は、立傳した北狄と東夷をどのように位置づけるのであろうか。まず北狄である烏丸鮮卑について、『魏志』卷三十　烏丸鮮卑傳序に、

i書蠻夷夏を猾すと載せ、詩玁狁孔だ熾んと稱す。久しきかな其の中國の患ひと爲るや。……ii建安中、呼廚泉南單于入朝し、遂に留まりて內侍し、右賢王をして其の國を撫せしめ、而して匈奴節を折ること、漢の舊に過ぐ。iii然るに烏丸・鮮卑稍く更も彊盛し、亦た漢末の亂に因り、中國事多く、外を討つに遑あらず、故に漠南の地を擅にするを得、城邑を寇暴し、人民を殺略し、北邊仍りに其の困を受く。(40)

とある。i『尙書』舜典・『詩經』小雅　六月を根據として夷狄の脅威が述べられ、ii匈奴の衰亡が述べられ、iiiそれを繼承する北狄として烏丸・鮮卑を位置づける。『三國志』は、北狄を中國の脅威として位置づけるのである。そして、『魏志』卷三十　烏丸鮮卑傳序には續けて、

i會袁紹河北を兼ね、乃ち撫して三郡の烏丸を有ち、其の名王を寵して其の精騎を收む。其の後、尙・熙又蹋頓のもとに逃る。蹋頓又驍武にして、邊の長老皆之を冒頓に比し、其の阻遠なるを恃み、敢て亡命を受け、以て百蠻に雄たり。ii太祖師を潛めて北伐し、其の不意に出で、一戰して之を定め、夷狄懾服し、威朔土に振るふ。遂に烏丸の衆を引きて服從征討し、而して邊民用て安息を得たり。iii後に鮮卑の大人たる軻比能復た群狄を制御し、盡く匈奴の故地を收め、雲中・五原より以東遼水に抵たるまで、皆鮮卑の庭と爲す。數々塞を犯し邊を寇し、幽・幷之に苦しむ。田豫馬城の圍有り、畢軌陘北の敗有り。iv靑龍中、帝乃ち王雄を聽し、劍客を遣はして之を刺さしむ。然る後に種落離散し、互ひに相ひ侵伐し、彊者は遠く遁れ、弱者は服を請ふ。v是れ由り邊陲差安んじ、漠南事少く、時に頗る鈔盜ありと雖も、復た相ひ扇動すること能はず。烏丸・鮮卑卽ち古の所謂東胡なり。其の習俗、前事、漢記を撰する者

已に錄して之に載せり。[41]

とある。i烏丸は袁紹と結び、その指導者である蹋頓は袁紹の子である袁尙・袁熙を保護し、邊境において嘗ての匈奴の冒頓單于に比せられるほどの勢力を誇った。ii そこで曹操は、奇襲をしかけて烏丸を平定した。iii 次に鮮卑の軻比能が匈奴の故地を制壓して魏の幽州・幷州を侵略した。iv 青龍年間、王雄が送り込んだ刺客によって軻比能が殺害された。そして iv これ以降、「時に頗る鈔盜ありと雖も、復た相ひ扇動すること能はず」というまでに邊境の情勢は安定したのである。

この序文から、北狄は中國の脅威であり、曹魏がその脅威を除く過程が概括されていることがうかがえよう。つまり、『三國志』の北狄とは、中國の脅威であり、その夷狄を平定した曹魏の正統性を明らかにする存在なのである。

では次に、東夷はどのように位置づけられるのであろうか。『魏志』巻三十　東夷傳序に、

而るに i 公孫淵父祖三世を仍ねて遼東を有ち、天子其の絶域なるが爲に、委ぬるに海外の事を以てし、遂に東夷を隔斷し、諸夏に通ずるを得ざらしむ。景初中、大いに師旅を興し、淵を誅し、又軍を潛めて海に浮かべ、樂浪・帶方の郡を收め、而る後に海表謐然として、東夷屈服す。……ii 夷狄の邦と雖も、而れども俎豆の象存す。iii 中國禮を失ひ、之を四夷に求むること、猶ほ信なり。[42]

とある。i 魏と東夷の關係を遮斷していた公孫淵が景初年間に討伐されると、東夷と中國との關係が恢復された。そして、ii その東夷には、「俎豆の象」があり、iii 中國が「禮」を失えば、これを四夷に求めると言う。

東夷に「俎豆の象」があることは、すでに『漢書』に見えている。巻二十八　地理志下に、

i 玄菟・樂浪、武帝の時置き、皆朝鮮・濊貉・句驪の蠻夷。殷道衰へ、箕子去りて朝鮮に之き、其の民に教ふるに禮義・田蠶織作を以てす。樂浪朝鮮の民禁八條を犯せば、相ひ殺すに當時を以て殺を償ひ、相ひ傷なふに穀を以て償ひ、相ひ盜む者は男は沒入して其の家奴と爲し、女子は婢と爲し、自ら贖はんと欲する者は、人ごとに五十萬。免れて民と爲ると雖も、俗は猶ほ之を羞じ、嫁取に讎へる所無く、是を以て其の民終に相ひ盜まず、門戸の閉無く、婦人

貞信にして淫辟ならず。ⅲ其の田民飲食するに籩豆を以てし、都邑頗る吏及び内郡の賈人に放效し、往往にして杯器を以て食す。ⅱ郡は初め吏を遼東に取りしも、吏の民の閉臧無きを見るもの、及び賈人の往く者、夜ごとに則ち盜を爲し、俗稍く益々薄し。今禁を犯すものの浸多きに於いて、六十餘條に至る。貴ぶ可きかな、仁賢の化たるや。ⅳ然るに東夷は天性柔順にして、三方の外に異なり、故に孔子道の行はれざるを悼み、浮を海に設け、九夷に居らんと欲するは、以有るかな。樂浪の海中に倭人有り、分かれて百餘國と爲り、歳時を以て來りて獻見すと云ふ。[43]

とある。ⅰ武帝によって置かれた玄菟郡・樂浪郡には、朝鮮・濊貊・句驪といった蠻夷がいたが、それは箕子の教化を受けた民であった。[44] ⅱそして、田野の民は飲食に「籩豆」を用いるが、都邑では吏や内郡の商人の眞似をして「杯器」で食事をすることが多い。ⅲだが、その風俗は漢の郡吏や商人によって損なわれるようになった。ⅳもともと東夷の天性は從順であり、三方の「外」とは異なるもので、それは孔子に九夷に住みたいと思わせるほどであった。このように、すでに『漢書』地理志には、『三國志』に見える「俎豆の象」に類する「籩豆」を利用し、「天性柔順」と評される東夷が記されている。

ところで、このような地理志に見える東夷への評價が『漢書』の四夷傳に反映されることは無かった。『漢書』が立傳した東夷は、衞氏朝鮮の記錄である『史記』の朝鮮列傳を引き寫したものにすぎず、さらに『漢書』は夷狄を「外」として四夷を一元的に位置づけるものであった。そのため、地理志で三方の「外」と異なると評された「朝鮮・濊貊・句驪の蠻夷」が、朝鮮傳において具體的に記されることはなかったのである。

さて、この東夷を特別視する觀念は、ⅳにあるように、孔子が「九夷」の地に住まおうとした逸話が根據となっている（『論語』子罕）。そして、この九夷を東夷とする解釋は、後漢時代では通說であったことが、後漢後期の馬融『論語注』からもうかがえる（『論語集解』子罕引）。この後、三國魏の何晏『論語集解』は、この馬融の注を引いており、後漢三國を通じてこの解釋は繼承されているのである。また、東夷傳序の結論に見える「中國禮を失ひ、之を四夷に求むること、猶ほ

信なり」は、『左傳』昭公十七年の「天子官を失へば、學は四夷に在り、猶ほ信なり」に據るものであろう。[45] これは魯に來朝した郯子が、少皡氏の官名の由來を詳細に說明し、それを郯子から學んだ孔子の發言である。以上のような孔子の東夷への評價を根據とする東夷觀が、『三國志』東夷傳に繼承されていることは明らかであろう。

『三國志』が、このように東夷を特別視する背景として、以下の事情をあげることができよう。景初年間に公孫氏を滅ぼしたのは司馬懿であり、これ以降、東夷との通路が開かれた。すなわち東夷の來朝は、西晉司馬氏の祖である司馬懿の功績に繫がるのである。

さて、ここまで見てきたように『三國志』は、南蠻・西戎を立傳できず、北狄と東夷のみを立傳した。その中で、中國の脅威として北狄を論じ、それを征伐した曹魏の正統性を明らかにする一方、曹魏が孫吳への牽制を期待し、同時に司馬氏の功績の結果、來朝した東夷を中國の「禮」を遺す夷狄として位置づけた。言わば北狄と東夷それぞれに理念的役割が與えられたのである。

先述したように、『漢書』は、夷狄の列傳を一箇所にまとめながらも、匈奴・西域を重視し、西南夷兩粵朝鮮傳を壓縮した。それは、夷狄を一元的に「外」として位置づけており、そこに東夷と他の夷狄との違いを明らかにする必要性が存在しなかったからであった。一方、『三國志』は、三國の分裂という國際情勢と、西晉の成立事情により、北狄と東夷を理念的に辨別した。では、かかる『三國志』の特徵は、五胡の亂立と東晉の建國を經て劉宋期に完成された『後漢書』においてどのように繼承されたのであろうか。次に『後漢書』の檢討に進むこととしたい。

四　『後漢書』の四夷傳

『後漢書』は、『東觀漢記』や八家後漢書に代表される先行する史書の集積を經て劉宋文帝期、范曄によって本紀・列傳が完成された。その夷狄の列傳は、東夷列傳・南蠻西南夷列傳・西羌傳・西域傳・南匈奴列傳・烏桓鮮卑列傳という六つ

の列傳で構成され、東西南北の夷狄がそれぞれ獨立した傳を立てられ、整備されたものとなっている（→表『後漢書』）。では、なぜ『後漢書』は四夷それぞれに傳を立てたのであろうか。ここでもまた列傳の論から、四夷それぞれの位置づけを檢討する必要があるだろう。そこでまずは四夷傳の末尾にあたる烏桓鮮卑列傳の論から確認していきたい。

『後漢書』列傳八十　烏桓鮮卑列傳論に、

論に曰く、i四夷の暴、其の埶ひは互ひに彊し。ii匈奴は隆漢に熾んにして、西羌は中興に猛く、而して靈獻の間、二虜迭（たが）ひに盛んなり。石槐は驍猛にして、盡く單于の地を有ち、蹋頓は凶桀にして、遼西の土に公據す。其の中國を陵跨し、患ひを生人に結ぶ者、世として寧きこと靡し。iii然れども制御の上略、歷世聞くこと無し。周・漢の策、僅かに中下を得たり。將た天の冥數、以て是に至れるかと。[46]

とある。i前漢をも含む四夷の「暴」がかわるがわる强勢を誇った。ii漢の脅威となった夷狄は、前漢の匈奴（北狄）、後漢の西羌（西戎）、後漢末期の烏桓・鮮卑（北狄）である。[47] iiiそして、先に見た嚴尤の論を踏まえ、夷狄を制御する上策が歷代存在しないとする。

四夷を「暴」の一字で象徵させたうえで、前漢の匈奴とともに、後漢の西羌（西戎）・後漢末の烏桓鮮卑（北狄）を竝び稱している。『後漢書』四夷傳は、北狄と西戎をかくも漢の脅威として位置づけた。それは別の夷狄列傳の論からもうかがえる。

『後漢書』列傳七十六　南蠻西南夷列傳論に、

蠻夷は巖谷に附阻すと雖も、而るに類ね土居すること有り、荊・交の區に連涉し、巴・庸の外に布護するもの、量り極む可からず。然れども其の凶勇狡筭なること、羌狄よりも薄く、故に陵暴の害、深きこと能はざるなり。[48]

とある。南蠻は、「羌狄」に比べれば害はすくないと言う。羌狄とは、西羌と北狄である。

夷狄の要素として掲げられる「凶勇狡筭」という性質は、すなわち「暴」という表現に結實する。『後漢書』において

は、その象徴が羌狄だったのである。

それをふまえたうえで『後漢書』四夷傳の論の文字數を數えると、東夷列傳論（一七二字）、南蠻西南夷列傳論（二九八字）、西羌傳論（七四六字）、西域傳論（五〇二字）、南匈奴列傳論（七〇三字）、烏桓鮮卑列傳論（九二字）となる。西羌（西戎）と南匈奴（北狄）が重視されて論じられていることは明らかであろう。『後漢書』は、四夷の中でも「暴」の象徴として位置づける西羌、北狄の列傳を重視しているのである。

その西羌について、『後漢書』列傳七十七　西羌傳論に、

> ⅰ羌は外患なりと雖も、實は內疾より深し。若し之を攻めて根せざれば、是れ疾疴を心腹に養ふなり。惜しいかな、寇敵略ぼ定まり、而して漢祚も亦た衰へり。嗚呼、ⅱ昔先王は九土を疆理し、畿荒を判別し、夷貊は性を殊にして、道を以て御し難きことを知る、故に諸華より斥遠し、其の貢職を薄くし、唯だ與に辭要するのみ。二漢の戎を御するの方の若きは、其の本を失へり。何となれば則ち、ⅲ先零の境を侵すや、趙充國之を內地に遷す。煎當の寇を作すや、馬文淵之を三輔に徙す。其の暫し安きの埶を貪り、其の馴服の情を信じ、日用の權宜を計り、經世の遠略を忘る。豈に夫れ微を識る者の爲ならんや。ⅳ故に微子は泣を象箸に垂れ、辛有は歎を伊川に浩いにするなりと。[49]

とある。ⅰ羌族の內住により、後漢が危機的狀況に陷ったのは、ⅱ先王と夷狄の關係を手本とせず、兩漢の對羌政策が失敗に終わったからである。そして、ⅲその具體例として前漢の趙充國、後漢の馬援による羌の徙民策を掲げ、ⅳ微子が紂王の象箸に涙し、辛有が周の都城の近傍である伊川で野蠻な被髪野祭を見かけ、嘆いた故事を結論とする。[50]

ここでは、羌の內徙策と、そのきっかけとなった趙充國・馬援の行動が批判される。[51] そして、本來の中國の地域が夷狄の地域へと轉換していくことを嘆く辛有の故事によってまとめている。つまり、『後漢書』は、西羌による夷狄の「暴」の背景として、後漢の內徙策を批判するのである。

次いで匈奴について、『後漢書』列傳七十九　南匈奴列傳に、

ⅰ單于は震へ懾れて屏氣し、氈を蒙りて烏孫の地に遁走し、而して漠北空し。若し其の時埶に因り、其の虚曠なるに及び、ⅱ南虜を陰山に還し、河西を內地に歸せば、上は光武の權宜の略を申べ、下は戎羯の華を亂すの變を防がん。耿國の筭をして當世に謬らず、袁安の議後王に從はれしむれば、平易正直なること、此の若く其れ弘きなり。ⅲ而るに竇憲三捷の效を矜り、經世の規を忽せにし、狼戾にして端しからず、專ら威惠を行ひ、遂に復た更めて北虜を立て、其の故庭に反らしめ、竝びに恩もて兩つながら護りて、以て己の福を私し、天公を棄蔑し、坐ろに大鯁を樹つ。永ら前載を言ふに、何ぞ恨憤の深きや。自後、經綸は方を失ひ、畔服すること一ならず、其の疢毒を爲すこと、胡ぞ言ひ單くす可けんや。ⅳ降りて後世に及び、翫ひて常の俗と爲り、終に神鄉を呑噬し、帝宅を丘墟ならしむ。嗚呼、千里の差は、興ること毫端自りし、失得の源は、百世磨せずと。[52]

とある。ⅰ北匈奴が漠北から驅逐されると、ⅱ漢側について西河に南下していた南匈奴を陰山に返すことで、「戎羯」が中國を亂すことを防ぐことができたのではないかと論じたうえで、ⅲ北匈奴と南匈奴を竝立させることで南匈奴の內地化を進めた竇憲への批判を展開する。ⅳそして、その後漢の對匈奴政策の失策が「帝宅を丘墟」ならしめた「百世」の問題に繫がったとする。

ここでも北狄である匈奴について、その內地化の批判を展開し、さらには五胡の發端として位置づけている。[53] つまり、西羌と南匈奴は「百世」、すなわち後漢から范曄が生きた六朝期に至る脅威の根源であり、こうした四夷の「暴」の歷史的原因を明らかにすることが『後漢書』四夷傳の目的なのである。

では、四夷の「暴」を重點的に論じ、その象徵である西羌・南匈奴を重視する『後漢書』は、なぜ『漢書』のように東夷と南蠻西南夷を壓縮しなかったのであろうか。なるほど先述したように、羌狄よりも害がすくないと評された南蠻は、西南夷とともに一つの列傳としてまとめられている。だが、それでも『漢書』のように朝鮮地域を含めた東夷と一括されることは無かった。東夷・南蠻西南夷にもまたそれぞれ異なる位置づけを探ることが必要となろう。そこで、兩者の序と

論を確認したい。

東夷について、『後漢書』列傳七十五　東夷列傳序に、

ⅰ王制に云ふ、東方は夷と曰ふ。夷なる者は、柢なり。言ふこころは仁にして生を好み、萬物は地を柢(おか)して出づ。故に天性柔順にして、道を以て御し易く、君子・不死の國有るに至れり。ⅱ夷に九種有り、畎夷・于夷・方夷・黄夷・白夷・赤夷・玄夷・風夷・陽夷と曰ふ。故に孔子九夷に居らんと欲せしなり。……中興自りの後、四夷來り賓(まつろ)ひ、時に乖畔有りと雖も、而も使驛絶えず。故に國俗風土、略記するを得可し。ⅲ東夷は率ね皆土著にして、飲酒歌舞を憙び、或いは弁を冠り錦を衣、器には俎豆を用ふ。ⅳ所謂る中國禮を失へば、之を四夷に求むる者なり。凡そ蠻・夷・戎・狄の總じて四夷と名づくる者は、猶ほ公・侯・伯・子・男の皆諸侯と號するがごとしと云ふ。(54)

とある。ⅰ『禮記』王制を引いた上で、「天性柔順」である東夷の性質が述べられ、ⅱ九夷と孔子の故事が述べられる。そして、ⅲ「弁を冠り錦を衣、器には俎豆を用ふ」とあるように東夷には禮に類するものがある。ⅳ「中國禮を失へば、之を四夷に求むる」とあるように、「禮」の可能性を四夷に求めるのである。

ⅱにおける「天性柔順」という表現に加え、ⅲ・ⅳのいずれも東夷を「禮」の夷狄として特別視する『漢書』地理志・『三國志』を繼承したものであることは明らかであろう。また、九夷を東夷であると後漢の馬融『論語注』が説明することは先述したが、ⅱに見えるように、『後漢書』は九夷の內譯をより具體的に說明している。先に『後漢書』は四夷の「暴」を重點的に論じ、その象徵である西羌・南匈奴を重視すると述べたが、「禮」の夷狄として象徵される東夷についてもけっして輕視しているわけではないのである。

ここから言えることは、『後漢書』は、四夷に「禮」と「暴」という二面性を見出し、「暴」の側面を强調しながらも、「禮」の可能性をそなえた夷狄の役割を東夷に與えたということである。

では、こうした四夷に對する二つの側面を揭げる『後漢書』は、南蠻西南夷をどのように位置づけたのか。南蠻につい

ては、羌狄と比較して害がすくないことが重視されたことは先述したとおりである。その上で、『後漢書』列傳七十六南蠻西南夷列傳論を見ると、

ⅰ服叛は常なり難く、威澤は時に曠しと雖も、ⅱ其の化行はるるに及びては、則ち緩耳雕腳の倫、獸居鳥語の類、種を舉げて落を盡くし、面を回らして吏を請ひ、海を陵ぎ障を越え、譯を累ねて以て內屬せざるは莫し。……豈に柔服の道、必ず斯に足らんや。ⅲ然れども亦た遠きを致す者なり。[55]

とある。ⅰ南蠻は叛服常がない。ⅱしかし、敎化さえ行われれば、內屬する。ⅲ後漢の統治は、遠方を招くことはできていたと評している。

南蠻西南夷は、後漢が「遠」を致すことに成功した夷狄として評價されている。先に西羌傳論で見たように、後漢の對羌政策は、「諸華より斥き遠け、其の貢職を薄くし、唯だ與に辭要す」という「本」を「失」うものであった。そうした意味において、南蠻西南夷の存在は、害が薄いにとどまらない。ⅱ「其の化行はるるに及びては……譯を累ねて以て內屬せざるは莫し」とあるように、「化」さえ行われれば、南蠻西南夷が後漢に附き從ったと論じているのである。羌狄ほどの「暴」性があるわけでもなく、「禮」を備えてもいない一方、南蠻西南夷は、「化」が行われる可能性を有していたのである。

ここまで、『後漢書』が四夷の「暴」として象徵される西戎・北狄を重視しつつ、四夷が「禮」を有する可能性として東夷を表彰し、「化」が行われる可能性を南蠻西南夷に求めたことを確認した。かつて前漢という統一帝國を記錄した『漢書』は、四夷を一元的に「外」として整理した。だが、同じく統一帝國を記錄する『後漢書』は、かくも多元的に四夷を辨別しているのである。こうした『後漢書』の四夷傳の背景として、五胡と東晉・劉宋をめぐる國際情勢に觸れておく必要があるだろう。

五胡と向き合う東晉・劉宋の情勢が『後漢書』に影響を與えたことは想像に難くない。[56]范曄は、東晉・劉宋を取り卷く

今日の事態の淵源を兩漢の夷狄の內地化に求めたのである。そこで問題となるのが、「禮」をそなえる東夷と「化」の可能性を與えられた南蠻である。

まず東夷と東晉・劉宋とはどのような關係にあったのか。文獻史料で確認できる『後漢書』成立までの東晉・劉宋期に入朝した東夷は、以下のようになる。[57]

・百濟　↓咸安二（三七二）年・太元九（三八四）年・義熙十二（四一六）年・元嘉元（四二四）年・元嘉二（四二五）年・元嘉六（四二九）年・元嘉七（四三〇）年。

・高句麗↓義熙九（四一三）年・元熙二（四二〇）年・元嘉元（四二四）年・元嘉十三（四三六）年・元嘉十五（四三八）年。

・倭　↓義熙九（四一三）年・永初二（四二一）年・元嘉七（四三〇）年・元嘉十五（四三八）年。

百濟・高句麗・倭といった東夷の東晉・劉宋への入朝を見ると、全體として東晉末の義熙年間以降、朝貢の頻度が上がっている。この背景に、義熙六（四一〇）年から始まる劉裕の北伐により、南燕が滅亡、山東半島が確保されたことがあるのは夙に先學が指摘するとおりである。[58] この東晉末から劉宋期に本格化する東夷の入朝が、『漢書』地理志以來の東夷への特別視も加わって、その立傳のありかたに影響を與えたと言えるのではないか。

次に南蠻であるが、後漢初頭以降、急速に文獻史料に浮上してくる長江中流域の武陵蠻は、蜀・魏による懷柔を受け、これに對抗して吳による武陵蠻討伐が展開されるなど、歷史的に無視できない存在となっていた。[59] さらに、五胡と向き合う東晉・劉宋との關わりにおいて、より重要な存在であったことは、東晉における陶侃・庾翼・桓溫など西府軍を率いた實力者が南蠻校尉を歷任していることからもうかがえよう。[60] 中原の五胡と爭う中で長江中流域の南蠻は、三國時代の武陵蠻と同樣に一定の役割が期待されていたものと思われる。

このように、五胡と對峙しつつ、東夷・南蠻を取り込まねばならない複雜な國際情勢の中で編纂された『後漢書』は、

『漢書』以降の夷狄列傳の様式を繼承しつつも、四夷をより多元的に辨別するために四夷傳を整備したと言えるのではないだろうか。

さて、最後に、西域傳について述べておきたい。『後漢書』における四夷傳論は、東夷傳の序論において四夷の「禮」を象徴する夷狄として東夷を、四夷の「暴」を象徴する夷狄として匈奴・西羌・烏桓鮮卑を位置づけた。そして、これらと相對化されて南蠻西南夷は「化」される夷狄として位置づけられた。この中にあって、西域傳の論は獨特である。

論の前半を見るとその構成は、張騫によって西域と漢の通交が始まり、班超の活躍による戊己校尉の復活、西域都護の設置、そして甘英が西海に達したことが述べられている。(61) だがその後半部分は、佛教を生みだした身毒が中國よりも榮えているという情報に疑問を呈しつつ、佛教に關わる論述に割かれているのである。

『後漢書』列傳七十八　西域傳論に、

ⅰ佛道の神化に至りては、身毒より興るも、而るに二漢の方志は稱すること有る莫し。張騫は但だ地に暑溼多く、象に乘りて戰ふと著すのみ。班勇は其の浮圖を奉じて、殺伐ならずと列すと雖も、而るに精文・善法・導達の功は傳へ述ぶる所靡し。余は之を後説に聞くなり。ⅱ其國は則ち中土より殷んにして、玉燭和氣あり、靈聖の降集する所、賢懿の挺生する所にして、神跡の詭怪なること、則ち理は人區に絶し、感驗の明顯なること、則ち事は天外に出づ。而るに騫・超の聞くこと無き者は、豈に其れ道は往運に閉ざされ、數は叔葉に開けるか。然らずんば、何ぞ誣異の甚だしきや。ⅲ漢は楚英の始めて齋戒の祀りを盛んにせしより、桓帝又華蓋の飾りを修む。將いは微義未だ譯されず、而して但だ之を神明とせしか。ⅳ其の心を清ませ累を釋つるの訓、空と有と兼ね遣るの宗を詳にするに、道書の流なり。ⅴ且つ仁を好み殺を惡み、敝を蠲き善を崇び、所以に賢達の君子は多く其の法を愛す。ⅵ然れども大を好みて不經、奇譎なること已むこと無く、鄒衍の談天の辯、莊周の蝸角の論と雖も、尚ほ未だ以て其の萬一を概くすに足らず。ⅶ又精靈の起滅、因報の相尋ぬること、曉かなるが若きにして昧き者なれば、故に通人も多く惑ふ。ⅷ蓋し俗を

導くこと方無く、物に適ひて會を異にし、諸を同歸に取り、夫の疑說を措つれば、則ち大道は通ずと。[62]

とある。i佛教は身毒で起こったが、兩漢の記錄には見られず、班勇の記錄も身毒が佛教を奉じて殺伐としていないことを記すのみであり、[63]精妙な經文、すばらしい教法、人を善導する功績を傳えておらず、後づけの說で聞くばかりである。また、ii身毒が中國よりも榮えており、靈妙なる聖人が集まり、賢人が拔きん出て生まれる場所であり、神祕的な事績は不思議なことであり、道理は人界から超絕し、感應した靈驗が明らかであることは奇想天外であり、こうしたことを張騫・班超が傳えないのはどういうことであろうか。そして、iii楚王英・桓帝が佛を祀ったが、それは表層的に祀ったにすぎなかった。ivその心を淸め、煩惱を捨てる教え、空と有をあわせて捨てるという教えは、道家の書の流れである。さらにその教えから賢人たちにも多く愛されている。viしかしながら、誇大癖は尋常ではなく、奇々怪々さは止まることをしらず、鄒衍の天についての辯論、莊周の蝸牛角上の爭いですらその比ではない。viiまた、輪廻說や因果應報說は、明快なようでいて實はよくわからないので、道理に通じた人ですら戸惑っている。viiiおそらく世俗を導くのに決まった方法はなく、對象に應じて適したものは異なるが、これを一つの歸結する眞理に求め、その疑問點を捨て置けば、大道は通じ合うのであるとしている。

ところで、『宋書』卷六十九　范曄傳に、

曄は死すれば神滅すと常に謂ひ、無鬼論を著さんと欲せしに、是に至りて徐湛之に書を與えて云ふ、當に地下にて相訟ふべしと。其の謬亂此の如し。[64]

とある。この箇所は、刑死直前の范曄が錯亂している樣子を示す一節であるが、范曄は常日頃、死ねば神は滅ぶと言い、「無鬼論」を著そうとしていたと言う。吉川忠夫が指摘するように、范曄自身はこのように神滅論者・佛教否定論者であった。[65]そうした姿勢は、西域傳論vi～viiにおける佛教の教義に對する批判的な評價からもうかがえよう。

翻って西域傳の敍事を見ると、佛教に關わる記事は、天竺國＝身毒の記事を含めても、明帝が夢に「金人」を見たこと、

楚王英の信仰、桓帝が老子とともに佛陀を祀ったことで佛教を信仰する者が増えたという記事が見えるのみである。西域傳論がⅰ、ⅲで指摘するそれらの部分は、西域傳の敍事の中でも比較的僅かなものにすぎないのである。ではなぜ范曄は、西域についてかくも佛教を論じることに紙幅を割くのであろうか。それには當時における佛教と范曄との關係を確認しておく必要があるだろう。

東晉から劉宋を通じて南朝の社會には佛教が浸透し、道教系教團の反亂の鎮壓によって擡頭した劉裕を祖とする劉宋は、とりわけ佛教を尊重した。劉宋建國の永初元（四二〇）年には、范曄の父、范泰が建康に祇洹寺を建立している。そうした劉宋統治下の建康には各方面から佛教徒が集まり、從來の中國化した佛教とは異なるものも流入するようになった。その象徴とも言えるのが、新來のインド僧の影響を受けて、うずくまりながら手づかみで食事をとる、いわゆる踞食という文化の流入である。當然ながら、この踞食には多くの批判が巻き起こった。そして、その急先鋒となったのが范泰だったのである。[66] 范泰は祇洹寺を建立した佛教徒であるが、こうした中國の禮法を脅かすような新來の佛教のあり方には批判的であった。こうした父の姿勢が、その後の范曄の佛教否定論に影響を及ぼしたことは否定出來まい。ではなぜ、こうした佛教に關わる持論を『後漢書』西域傳の論に持ち込んだのであろうか。

『後漢書』列傳七十八　西域傳贊に、

贊に曰く、邊かなるかな西胡、天の外區なり。土物は瑛麗なるも、人性は淫虚なり。華の禮に率はず、典書有ること莫し。若し神道微かりせば、何をか恤へ何にか拘はれんと。[67]

とある。そもそも西域とは、中國の禮が届かない「外區」であり、人の性質は淫らで空虚であり、「神道」（＝佛教）がなければ懼れるものがなかったと言う。

であるならば、「外區」では中國の禮によらずとも「神道」によって獨自の秩序が保たれていたことになりはしないか。にも關わらず、『後漢書』はそうした「外區」として獨自の秩序を形成した西域の列傳を立てたのである。少なくとも范

曄は、『後漢書』西域傳を通じて「其國は則ち中土より殷ん」と稱される身毒に疑問を呈し、佛敎に疑義を投げかけることで、中國の禮が屆かない「外區」を四夷に位置づけようとしたのではないだろうか。

まとめ

ここまで『史記』・『漢書』・『三國志』・『後漢書』の四夷傳のありかたを、特にその四夷觀念に注目して檢討してきた。『史記』に登場する夷狄列傳は、突出した「敵國」である匈奴と對峙する情勢のもと、匈奴列傳の位置を對匈奴戰爭という枠組みに押し上げ、匈奴と他の四夷とを同列に位置づけることが出來なかった。また、一見すると夷狄の列傳である大宛列傳は、その配列と張騫の大夏到達を述べる論からも、むしろその周圍の才能や職業に關わる列傳と竝び、地理情報という一つの分野に關わる列傳として位置づけられるものであった。一方、匈奴との對峙を克服した後漢前期に編纂された『漢書』は、匈奴・西域を含めた夷狄を華の「外」として一元的に捉える四夷觀念のもとに列傳を整理した。

時代を下り、三國の分裂と西晉の成立事情を背景として編纂された『三國志』は、北狄と東夷のみを立傳した。だが、その特殊な背景事情は、北狄を中國の脅威として位置づける一方、東夷を「禮」の夷狄として位置づけ、四夷を理念的に辨別する方向性を開いた。そして、五胡と對峙する複雜な國際情勢を背景とする『後漢書』は、四夷の「暴」という性質を强調する一方、それが「禮」を備えるという二面性を揭げ、北狄・西戎を「暴」とし、東夷を「禮」の夷狄として位置づけ、さらに南蠻には「化」がおこなわれる可能性を示すと同時に、佛敎の存在とそれを生みだした身毒を西域傳に位置づけることで、佛敎により獨自の秩序を保ち、中國の禮が屆かない「外區」をも四夷の中に組み込み、より多元的な四夷の辨別を展開したのである。

このように、前漢武帝期から六朝劉宋初期にいたる國內外の情勢に左右された「前四史」の夷狄列傳は、その四夷觀念により、中國の「外」の多元的な夷狄という存在を國家の歷史に位置づけようとしたのである。

表

『史記』	『漢書』	『三國志』（『魏志』）	『後漢書』
……	……	……	……
108 韓長孺列傳	88 儒林傳	28 王毋丘諸葛鄧鍾傳	傳 66 循吏列傳
109 李將軍列傳	89 循吏傳	29 方技傳	傳 67 酷吏列傳
110 匈奴列傳	90 酷吏傳	30 烏丸鮮卑東夷傳	傳 68 宦者列傳
111 衞將軍驃騎列傳	91 貨殖傳	……	傳 69 儒林列傳
112 平津侯主父列傳	92 游俠傳		傳 70 文苑列傳
113 南越列傳	93 佞幸傳		傳 71 獨行列傳
114 東越列傳	94 匈奴傳		傳 72 方術列傳
115 朝鮮列傳	95 西南夷兩粤朝鮮傳		傳 73 逸民列傳
116 西南夷列傳	96 西域傳		傳 74 列女傳
117 司馬相如列傳	97 外戚傳		傳 75 東夷列傳
118 淮南衡山列傳	98 元后傳		傳 76 南蠻西南列傳
119 循吏列傳	99 王莽傳		傳 77 西羌傳
120 汲鄭列傳	100 敍傳		傳 78 西域傳
121 儒林列傳			傳 79 南匈奴列傳
122 酷吏列傳			傳 80 烏桓鮮卑列傳
123 大宛列傳			
124 游俠列傳			
125 佞幸列傳			
126 滑稽列傳			
127 日者列傳			
128 龜策列傳			
129 貨殖列傳			
130 太史公自序			

註

（1）華夷思想の形成については、那波利貞「中華思想」（『岩波講座東洋思潮――東洋思想の諸問題』岩波書店、一九三六年所收）・山田統「天下という觀念と國家の形成」（『山田統著作集一』明治書院、一九八一年）・安部健夫『中國人の天下觀念』（ハーバード・燕京・同志社東方文化講座委員會、一九五六年）・小倉芳彦「裔夷の俘――『左傳』の華夷觀念」・「華夷思想の形成」（著作集三『春秋左氏傳研究』論創社、二〇〇三年）などを參照。また、中國における華夷關係の理解については、陳連開「中國・華夷・蕃漢・中華・中華民族」（費孝通編『中華民族多元一體格局』中央民族大學版社、一九九九年所收、西澤治彦・塚田誠之・曾士才・菊池秀明・吉開將人譯『中華民族の多元一體構造』風響社、二〇〇八年）などを參照。

（2）兩漢から三國・西晉までの華夷論と政治史との關わりについては、日原利國「華夷觀念の變容」（『漢代思想の研究』研文出版、一九八六年所收）・渡邉義浩「兩漢における華夷思想の展開」（『後漢における「儒教國家」の成立』汲古書院、二〇〇九年所收）・「華夷思想と「徙戎論」」（『西晉「儒教國家」と貴族制』汲古書院、二〇一〇年所收）を參照。

（3）正史の四夷傳が、諸外國との國家的對等交際を認めないものであるという指摘については、那波利貞（前掲）を參照。

（4）渡邉義浩「國際關係より見た倭人傳」（『三國志より見た邪馬臺國』汲古書院、二〇一六年所收）。

（5）史記列傳次序、蓋成一篇、卽編入一篇、不待撰成全書後、重爲排比。故李廣傳後、忽列匈奴傳、下又列衞青、霍去病傳。朝臣與外夷相次、朝臣與外夷相次、已屬不倫。然此猶曰諸臣事皆與匈奴相涉也。公孫弘傳後、忽列南越・東越・朝鮮・西南夷等傳、下又列司馬相如傳。相如之下、又列淮南、衡山王傳。循吏後、忽列汲黯・鄭當時傳。儒林酷吏後、又忽入大宛傳。其次第皆無意義、可知其隨得隨編也。

（6）佐藤武敏「『史記』の內容上の特色」（『司馬遷の研究』汲古書院、一九九七年所收）。

（7）自三代以來、匈奴常爲中國患害。欲知彊弱之時、設備征討、作匈奴列傳第五十。

（8）漢既平中國、而佗能集楊越以保南藩、納貢職。作南越列傳第五十三。

（9）吳之叛逆、甌人斬濞、葆守封禺爲臣。作東越列傳第五十四。

（10）燕丹散亂遼閒、滿收其亡民、厥聚海東、以集眞藩、葆塞爲外臣。作朝鮮列傳第五十五。

（11）唐蒙使略通夜郎、而邛筰之君請爲內臣受吏。作西南夷列傳第五十六。

（12）漢既通使大夏、而西極遠蠻、引領內鄉、欲觀中國。作大宛列傳第六十三。

（13）內臣・外臣については栗原朋信『秦漢史の研究』（吉川弘文館、一九六〇年）を參照。

（14）佐藤武敏「『史記』の編纂過程」（前掲『司馬遷の研究』所收）。

(15) 太史公曰、孔氏著春秋、隱桓之閒則章、至定哀之際則微。爲其切當世之文而罔褒、忌諱之辭也。世俗之言匈奴者、患其徼一時之權、而務調納其說、以便偏指、不參彼己。將率席中國廣大、氣奮、人主因以決策、是以建功不深。堯雖賢、興事業不成、得禹而九州寧。且欲興聖統、唯在擇任將相哉。

(16) 太史公曰、尉佗之王、本由任囂。遭漢初定、列爲諸侯。隆慮離溼疫、佗得以益驕。甌駱相攻、南越動搖。漢兵臨境、嬰齊入朝。其後亡國、徵自樛女。呂嘉小忠、令佗無後。樓船從欲、怠傲失惑。伏波困窮、智慮愈殖、因禍爲福。成敗之轉、譬若糾墨。

(17) 太史公曰、越雖蠻夷、其先豈嘗有大功德於民哉。何其久也。歷數代常爲君王、句踐一稱伯。然餘善至大逆、滅國遷衆、其先苗裔繇王居股等猶尙封爲萬戶侯。由此知越世世爲公侯矣、蓋禹之餘烈也。

(18) 太史公曰、右渠負固、國以絕祀。涉何誣功、爲兵發首。樓船將狹、及難離咎。悔失番禺、乃反見疑。荀彘爭勞、與遂皆誅。兩軍俱辱、將率莫侯矣。

(19) 太史公曰、楚之先豈有天祿哉。在周爲文王師、封楚。及周之衰、地稱五千里。秦滅諸侯、唯楚苗裔尙有滇王。漢誅西南夷、國多滅矣、唯滇復爲寵王。然南夷之端、見枸醬番禺、大夏杖、邛竹。西夷後揃、剽分二方、卒爲七郡。

(20) 初、匈奴呼韓邪單于來朝、詔公卿議其儀。丞相霸、御史大夫定國議曰、聖王之制、施德行禮、先京師而後諸夏、先諸夏而後夷狄。詩云、率禮不越、遂視既發。相土烈烈、海外有截。陛下聖德充塞天地、光被四表、匈奴單于鄉風慕化、奉珍朝賀、自古未之有也。其禮儀宜如諸侯王、位次在下。望之以爲單于非正朔所加、故稱敵國。宜待以不臣之禮、位在諸侯王上。……。

(21) 「客臣」については、栗原朋信『秦漢史の研究』（吉川弘文館、一九六〇年）を參照。漢と匈奴の戰爭については澤田勳『匈奴――古代遊牧國家の興亡』（東方書店、一九九六年）を參照。

(22) 按此傳合在西南夷下。不宜在酷吏・游俠之閒、今誤列于此也。

(23) 榎一雄「史記大宛傳と漢書張騫・李廣利傳との關係について」（『榎一雄著作集』第七卷、汲古書院、一九九四年所收）。

(24) 佐藤武敏（前揭）を參照。

(25) 太史公曰、禹本紀言、河出崑崙。崑崙其高二千五百餘里、日月所相避隱爲光明也。其上有醴泉・瑤池。今自張騫使大夏之後也、窮河源、惡睹本紀所謂崑崙者乎。故言九州山川、尙書近之矣。至禹本紀・山海經所有怪物、余不敢言之也。

(26) 渡邉義浩「『漢書』における『尙書』の繼承」（『早稻田大學大學院文學研究科紀要第一分册』六一、二〇一六年）を參照。

(27) 南北匈奴の分裂については、澤田勳（前揭）を參照。また、內地化した南匈奴と後漢との軍事的關係については、小林聰「後漢の少數民族統御官に關する一考察」（『九州大學東洋史論集』一七、一九八九年）などを參照。

(28) 書戒蠻夷猾夏、詩稱戎狄是膺、春秋有道守在四夷、久矣夷狄之爲患也。

(29) 若乃征伐之功、秦漢行事、嚴尤論之當矣。故先王度土、中立封畿、分九州、列五服、物土貢、制外內、或脩刑政、或詔文德、遠近之勢異也。是以春秋內諸夏而外夷狄。夷狄之人貪而好利、被髮左衽、人面獸心。其與中國殊章服、異習俗、飲食不同、言語不通、辟居北垂寒露之野、逐草隨畜、射獵爲生、隔以山谷、雍以沙幕、天地所以絕外內也。

(30) 淮南・杜欽・揚雄之論、皆以爲此天地所以界別區域、絕外內也。書曰、西戎卽序。禹既就而序之、非上威服致其貢物也。

(31) 贊曰、楚・粵之先、歷世有土。及周之衰、楚地方五千里、而句踐亦以粵伯。秦滅諸侯、唯楚尙有滇王。漢誅西南夷、獨滇復寵。及東粵滅國遷衆、繇王居股等猶爲萬戶侯。三方之開、皆自好事之臣。故西南夷發於唐蒙・司馬相如、兩粵起嚴助・朱買臣、朝鮮由涉何。遭世富盛、動能成功、然已勤矣。追觀太宗塡撫尉佗、豈古所謂招攜以禮、懷遠以德者哉。

(32) 渡邉義浩「國際關係より見た倭人傳」(『三國志より見た邪馬臺國』汲古書院、二〇一六年所收)。

(33) 西戎傳と東夷傳の問題については、渡邉義浩(前揭)を參照。

(34) 評曰、山越好爲叛亂、難安易動。是以孫權不遑外禦、卑詞魏氏。凡此諸臣、皆克寧內難、綏靜邦域者也。呂岱淸恪在公、周魴譎略多奇、鍾離牧蹈長者之規、全琮有當世之才。貴重於時、然不檢姦子、獲譏毀名云。

(35) 異民族に對する基本姿勢として、蜀漢が懷柔策、魏が懷柔と討伐、そして孫吳が徹底した討伐策を展開したことについては、谷口房男「諸葛孔明の異民族對策」(『華南民族史硏究』綠蔭書房、一九九六年所收)を參照。また、山越と孫吳との關わりおよび、山越の認識をめぐる議論については、川本芳昭「六朝における蠻の理解についての一考察――山越・蠻漢融合の問題を中心として見た――」(『魏晉南北朝時代の民族問題』汲古書院、一九九八年所收)を參照。

(36) 評曰、黃權弘雅思量、李恢公亮志業、呂凱守節不回、馬忠擾而能毅、王平忠勇而嚴整、張嶷識斷明果、咸以所長、顯名發迹、遇其時也。

(37) 庲降都督については、石井仁「吳・蜀の都督制度とその周邊」(『三國志硏究』一、二〇〇六年)・劉華「略論蜀漢庲降都督」(『牡丹江敎育學院學報』二〇〇七年二期)・何畏「蜀漢庲降都督新考」(『歷史地理』二〇一四年二期)などを參照。また、蜀漢と西南夷との關係については、柿沼陽平「三國時代の西南夷社會とその秩序」(『中國古代貨幣經濟の持續と轉換』汲古書院、二〇一八年所收)を參照。

(38) 書稱東漸于海、西被于流沙。其九服之制、可得而言也。然荒域之外、重譯而至、非足跡車軌所及、未有知其國俗殊方者也。自虞暨周、西戎有白環之獻、東夷有肅愼之貢、皆曠世而至、其遐遠也如此。及漢氏遣張騫使西域、窮河源、經歷諸國、遂置都護以總領之、然後西域之事具存、故史官

得詳載焉。魏興、西域雖不能盡至、其大國龜茲・于寘・康居・烏孫・疏勒・月氏・鄯善・車師之屬、無歲不奉朝貢、略如漢氏故事。

(39) 西戎の白環は、西王母が獻上したことが諸史料に散見される。『漢書』巻二十一上律曆志注引『尚書大傳』に、「西王母來獻白玉琯」とあり、また、『後漢書』列傳五十上馬融傳注引『帝王紀』に「堯時憔僥氏來貢沒羽。西王母慕舜之德、來獻白環也」とある。東夷の肅愼が貢獻したことについては、『尚書』周書　周官に、「成王既伐東夷、肅愼來賀。王俾榮伯作賄愼之命」とある。

(40) 書載蠻夷猾夏、詩稱玁狁孔熾、久矣其爲中國患也。……建安中、呼廚泉南單于入朝、遂留內侍、使右賢王撫其國、而匈奴折節、過於漢舊。然烏丸・鮮卑稍更彊盛、亦因漢末之亂、中國多事、不遑外討、故得擅漠南之地、寇暴城邑、殺略人民、北邊仍受其困。

(41) 會袁紹兼河北、乃撫有三郡烏丸、寵其名王而收其精騎。其後尙・熙又逃于蹋頓。蹋頓又驍武、邊長老皆比之冒頓、恃其阻遠、敢受亡命、以雄百蠻。太祖潛師北伐、出其不意、一戰而定之、夷狄慴服、威振朔土。遂引烏丸之衆服從征討、而邊民得用安息。後鮮卑大人軻比能復制御群狄、盡收匈奴故地、自雲中・五原以東抵遼水、皆爲鮮卑庭。數犯塞寇邊、幽・幷苦之。田豫有馬城之圍、畢軌有陘北之敗。靑龍中、帝乃聽王雄、遣劍客刺之。然後種落離散、互相侵伐、彊者遠遁、弱者請服。由是邊陲差安、漠南少事、雖時頗鈔盜、不能復相扇動矣。烏丸・鮮卑卽古所謂東胡也。其習俗・前事、撰漢記者已錄而載之矣。

(42) 而公孫淵仍父祖三世有遼東、天子爲其絕域、委以海外之事、遂隔斷東夷、不得通於諸夏。景初中、大興師旅、誅淵、又潛軍浮海、收樂浪・帶方之郡、而後海表謐然、東夷屈服。……雖夷狄之邦、而俎豆之象存。中國失禮、求之四夷、猶信。

(43) 玄菟・樂浪、武帝時置、皆朝鮮・濊貊・句驪蠻夷。殷道衰、箕子去之朝鮮、敎其民以禮義・田蠶織作。樂浪朝鮮民犯禁八條、相殺以當時償殺。相傷以穀償。相盜者男沒入爲其家奴、女子爲婢、欲自贖者、人五十萬。雖免爲民、俗猶羞之、嫁取無所讎、是以其民終不相盜、無門戶之閉、婦人貞信不淫辟。其田民飮食以籩豆、都邑頗放效吏及內郡賈人、往往以杯器食。郡初取吏於遼東、吏見民無閉臧、及賈人往者、夜則爲盜、俗稍益薄。今於犯禁浸多、至六十餘條。可貴哉、仁賢之化也。然東夷天性柔順、異於三方之外、故孔子悼道不行、設浮於海、欲居九夷、有以也夫。樂浪海中有倭人、分爲百餘國、以歲時來獻見云。

(44) 箕子の朝鮮における敎化については、江畑武「箕子朝鮮開國傳承の展開――『漢書』・『魏略』・『魏志』を中心に」(『阪南論集人文・自然科學編』二五――一・二・三、一九八九年)を參照。

(45) 天子失官、學在四夷、猶信。

(46) 論曰、四夷之暴、其埶互彊矣。匈奴熾於隆漢、西羌猛於中興、而靈獻之閒、二虜迭盛。石槐驍猛、盡有單于之地、蹋頓凶桀、公據遼西之土。其陵跨中國、結患生人者、靡世

而寧焉。然制御上略、歴世無聞。周・漢之策、僅得中下。將天之冥數、以至於是乎。

(47) 匈奴については、澤田勳（前掲）を參照。また、後漢の西羌については、佐藤長「漢代における羌族の活動」（『チベット歴史地理研究』岩波書店、一九七八年所收）・渡邉義浩「後漢の羌・鮮卑政策と董卓」（前掲『三國志より見た邪馬臺國』所收）・酒井駿多「後漢の羌支配體制の成立と崩壞――護羌校尉を中心に」（『紀尾井論叢』四、二〇一六年）などを參照。また鮮卑・烏桓については、渡邉義浩「後漢の匈奴・烏桓政策と袁紹」（前掲『三國志より見た邪馬臺國』所收）を參照。

(48) 蠻夷雖附阻巖谷、而類有土居、連涉荆・交之區、布護巴・庸之外、不可量極。然其凶勇狡筭、薄於羌狄、故陵暴之害、不能深也。

(49) 羌雖外患、實深內疾。若攻之不根、是養疾痾於心腹也。惜哉、寇敵略定矣、而漢祚亦衰焉。嗚呼、昔先王疆理九土、判別畿荒、知夷貊殊性、難以道御、故斥遠諸華、薄其貢職、唯與辭要而已。若二漢御戎之方、失其本矣。何則、先零侵境、趙充國遷之內地。煎當作寇、馬文淵徙之三輔。貪其暫安之埶、信其馴服之情、計日用之權宜、忘經世之遠略。豈夫識微者之爲乎。故微子垂泣於象箸、辛有浩歎於伊川也。

(50) 紂王が象箸を作ったことを嘆き、後に殷の廢墟を前に涙を流したのは、李賢注が指摘するように、微子ではなく箕子（『史記』巻三十宋微子世家）。また、辛有の故事は、『左傳』僖公二十二年に、「初、平王之東遷也、辛有適伊川、見被髮而祭於野者。曰、不及百年、此其戎乎。其禮先亡矣。秋、秦・晉遷陸渾之戎于伊川」とある。

(51) 漢による羌の內徙策については、熊谷滋三「後漢の羌族內徙策について」（『史滴』九、一九八八年）を參照。

(52) 單于震懾屏氣、蒙氈遁走於烏孫之地、而漠北空矣。若因其時埶、及其虛曠、還南虜於陰山、歸河西於內地、上申光武權宜之略、下防戎羯亂華之變。使耿國之筭不謬於當世、袁安之議見從於後王、平易正直、若此其弘也。而竇憲矜三捷之效、忽經世之規、狼戾不端、專行威惠。遂復更立北虜、反其故庭、竝恩兩護、以私己福、棄蔑天公、坐樹大鯁。永言前載、何恨憤之深乎。自後經綸失方、畔服不一、其爲疢毒、胡可單言。降及後世、翫爲常俗、終於吞噬神鄉、丘墟帝宅。嗚呼、千里之差、興自毫端、失得之源、百世不磨矣。

(53) 南匈奴の內地化については、澤田勳（前掲）・渡邉義浩「後漢の匈奴・烏桓政策と袁紹」（前掲『三國志より見た邪馬臺國』所收）・「曹魏の異民族對策」（前掲『三國志より見た邪馬臺國』所收）などを參照。

(54) 王制云、東方曰夷。夷者、柢也。言仁而好生、萬物柢地而出。故天性柔順、易以道御、至有君子、不死之國焉。夷有九種、曰畎夷・于夷・方夷・黃夷・白夷・赤夷・玄夷・風夷・陽夷。故孔子欲居九夷也。……自中興之後、四夷來賓、雖時有乖畔、而使驛不絶。故國俗風土、可得略記。東夷率皆土著、憙飲酒歌舞、或冠弁衣錦、器用俎豆。所謂中國失禮、求之四夷者也。凡蠻・夷・戎・狄總名四夷者、猶公・侯・伯・子・男皆號諸侯云。

(55) 雖服叛難常、威澤時曠、及其化行、則緩耳雕腳之倫、獸居鳥語之類、莫不舉種盡落、回面而請吏、陵海越障、累譯以內屬焉。……豈柔服之道、必足於斯。然亦云致遠者矣。

(56) 五胡十六國については、三崎良章『五胡十六國の基礎的研究』(汲古書院、二〇〇六年)・『五胡十六國――中國史上の民族大移動』(東方書店、二〇〇二年)などを參照。

(57) 東夷の朝貢については、金子ひろみ「南朝梁の外交とその特質」(鈴木靖民・金子修一編『梁職貢圖と東部ユーラシア世界』勉誠出版、二〇一四年所收)の交渉國對比表など參照。

(58) 劉裕の北伐と日本列島・朝鮮半島諸國の入朝の關わりについては、藤間生大『倭の五王』(岩波書店、一九六八年)などを參照。

(59) 谷口房男「三國時代の武陵蠻」(『華南民族史研究』綠蔭書房、一九九六年所收)を參照。また、南朝と蠻夷との關わりについては、川本芳昭「六朝における蠻の理解についての一考察――山越・蠻漢融合の問題を中心として見た――」(『魏晉南北朝時代の民族問題』汲古書院、一九九八年所收)を參照。

(60) 三崎良章「「十六國」諸國の異民族統御官と東晉――南蠻校尉の設置を中心として」(前掲『五胡十六國の基礎的研究』所收)は、南蠻校尉は荊州刺史任官者の附隨的官職と指摘するにとどめている。

(61) 後漢の西域經營の沿革については、伊瀨仙太郎『中國西域經營史研究』(巖南堂書店、一九五五年)などを參照。

(62) 至於佛道神化、興自身毒、而二漢方志莫有稱焉。張騫但著地多暑溼、乘象而戰、班勇雖列其奉浮圖、不殺伐、而精文善法導達之功靡所傳述。余聞之後說也、其國則殷乎中土、玉燭和氣、靈聖之所降集、賢懿之所挺生、神跡詭怪、則理絕人區、感驗明顯、則事出天外。而騫、超無聞者、豈其道閉往運、數開叔葉乎。不然、何誣異之甚也。漢自楚英始盛齋戒之祀、桓帝又修華蓋之飾。將微義未譯、而但神明之邪。詳其清心釋累之訓、空有兼遣之宗、道書之流也。且好仁惡殺、蠲敝崇善、所以賢達君子多愛其法焉。然好大不經、奇譎無已、雖鄒衍談天之辯、莊周蝸角之論、尙未足以概其萬一。又精靈起滅、因報相尋、若曉而昧者、故通人多惑焉。蓋導俗無方、適物異會、取諸同歸、措夫疑說、則大道通矣。

(63) 『後漢書』列傳七十八西域傳に、「班固記諸國風土人俗、皆已詳備前書。今撰建武以後其事異於先者、以爲西域傳、皆安帝末班勇所記云」とあるように、西域傳に見える建武年間以降の記事については、班勇の記錄が基礎となっている。

(64) 曄常謂死者神滅、欲著無鬼論、至是與徐湛之書云、當相訟地下。其謬亂如此。

(65) 范曄の佛教觀については、吉川忠夫「踞食論爭をめぐって」(『六朝精神史研究』同朋舍出版、一九八四年所收)を參照。

(66) 劉宋期の佛教については、塚本善隆「南朝「元嘉治世」の佛教興隆について」(塚本善隆著作集三『中國中世佛教史論攷』大東出版社、一九七五年所收)などを參照。また、

踞食論爭については、吉川忠夫（前掲）を參照。

（67）　贊曰、湯矣西胡、天之外區。土物瓌麗、人性淫虛。不率華禮、莫有典書。若微神道、何恤何拘。

（＊本稿は六朝學術學會第二二回大會において發表したものを加筆修正したものである）

THE DEVELOPMENT OF THE CONCEPT OF THE FOUR BARBARIANS 四夷 AS SEEN IN TREATISES ON BARBARIANS 夷狄列傳 OF "THE FIRST FOUR HISTORIES" 前四史

MITSUMA Hirohiko

This paper focuses on the concept of the Four Barbarians 四夷 within the ideology that emphasized the Hua-Yi 華夷 distinction by comparing the *Shiji,* the *Hanshu,* the *Sanguozhi,* and the *Houhanshu,* which are collectively known as the "First Four Histories" 前四史, in order to demonstrate the interrelationship between the Hua-Yi distinction and history books from the Han Dynasty to the Six Dynasties.

The *Shiji* reflected the situation of the Former Han Dynasty that confronted the Xiongnu, a newly prominent potential "enemy country" 敵國. Therefore, the treatise on the Xiongnu 匈奴列傳 was positioned within the framework of the war against the Xiongnu, and the Xiongnu were never placed in the same category as other barbarians. In addition, the treatise on the Dayuan 大宛列傳, which was traditionally regarded as one of the treatises on barbarians, must be regarded as a description of talent and deeds of figures related to the Dayuan based on its placement in the *Shiji* and the fact that it mainly describes the arrival of Zhang Qian 張騫 at the Daxia大夏.

The *Hanshu,* which was compiled during the former half of the Later Han Dynasty when the Han had already won the war against the Xiongnu, organized treatises on barbarians under the Four Barbarians concept that understood barbarians unitarily, including the Xiongnu and the Western Region 西域 as the "Outsiders" beyond the Zhonghua中華.

Behind the fact that the *Sanguozhi* had only treatises on the northern and the eastern barbarians was the tripartite division of China into the three kingdoms and the circumstances of the establishment of the Western Jin Dynasty. Given such a unique background, the *Sanguozhi* positioned the northern barbarians as a threat to China, while positioning the eastern barbarians as ones who understood "courtesy" 禮, which indicates a trend to make ideological discrimination among the Four Barbarians.

Behind the compilation of the *Houhanshu* was a complex international situation involving confronting the invasion of the Five Barbarians 五胡, and it highlighted the two differing aspects of "violence" 暴 and "courtesy" among the Four

Barbarians. It positioned the northern and the western barbarians as characterized by "violence" but positioned the eastern barbarians as knowing "courtesy," and furthermore showed the possibility of civilizing the southern barbarians. In addition, by placing Shendu 身毒, the birthplace of Buddhism, into the treatise on the Western Region, it included that area, which had maintained an independent order based on Buddhism, into the "outside area" 外區of the Four Barbarians that did not recognize the "courtesy" of China, and thereby developing multi-dimensional distinctions among the Four Barbarians.

Thus "The First Four Histories," influenced by domestic and foreign affairs from the era of Emperor Wu of the Former Han Dynasty to the early stage of the Liu-Song Dynasty of the Six Dynasties, positioned multi-dimensional barbarians from the "outside" into the dynastic histories on the basis of the concept of the Four Barbarians.

THE ORIGIN OF THE IDEA OF HANIZATION, OR SINICIZATION 漢化

HORIUCHI Junichi

Xiaowendi 孝文帝, 6th Emperor of the Northern Wei Dynasty, enforced various policies that have been called *Hanhua* 漢化, which can be translated as Hanizaion or Sinicization in English. The word *Hanhua,* or *Kanka* in its Japanese reading, is in general use and is seen in school textbook and the like. But *Hanhua* was not found in earlier historical texts. Moreover, recent research has shown that these policies were not intended to bring about Sinicization. This paper aims to clarify where the idea of *Hanhua* came from.

Xiaowendi's reforms were seen by his contemporaries as a restoration of older Chinese dynasties such as the Zhou or the Han. They were not understood in terms of cultural or ethnic matters. After 10th century, this reformation came to be called *"yong Xia bian Yi"* 用夏變夷, or "change barbarians by Chinese culture." This phrase shows that Xiaowendi's reformation was recognized as a cultural matter between northern barbarians and central Chinese at that time. This understanding lasted until 20th century.

The modern discipline of history come into existence in Japan at the end of 19th century. The first generation of scholars explained Xiaowendi's reformation as a restoration as had contemporaries of Xiaowendi. In the 20th century, Japanese scholars started to use the term *Shinaka* 支那化 (Sinicization), and then *Kanka*